

## 第 4 回 関西広域産業ビジョン改訂委員会 議事要旨

1. 日 時： 平成 30 年 11 月 9 日（金） 15：00～17：00

2. 場 所： 大阪府庁本館 5 階 議会特別会議室（大）

3. 出席者： 別紙出席者名簿のとおり

### 4. 議事概要

- 事務局より、資料について説明。
- 「関西広域産業ビジョン（改訂版）」中間案について、意見交換。

### 【全体】

#### <委員>

- ・ 現行ビジョンを手堅く延長した、というイメージは否めない。目玉施策がない。
- ・ もう少し、新規の部分がどこなのか目立つように工夫すれば、現行ビジョンの拡張という印象は拭えるのではないか。記載方法を工夫して、新しい内容、バージョンアップした内容がより明確にわかるようにしていただきたい。
- ・ 改訂ビジョンの目玉となるものがないのではという指摘があったが、万博の成否で変わってくるのではないかと考える。時間軸上、盛り込めない部分もあると思うが、中間案から「万博」のワードを抜いても何の変化もなく、その程度のイベントなのか、という見方もできる。現時点ではこの表現でも致し方ないが、誘致が成功したら、もっと万博と関連するような書きぶりで記載いただけると、それが目玉になるのではないか。
- ・ 万博については、万が一、誘致に成功しなかった場合は、その部分を削除する、というくらいの覚悟で記載しておいたほうがいいのか。誘致している立場として、もっと盛り上げていかないといけないのではないか。
- ・ 万博について、確かに 1970 年の大阪万博の時とはインパクトが異なっているが、この時代の万博のありようとして、地域経済への活性化に及ぼす影響など、記載いただいたほうがいいのかもしい。
- ・ 1970 年の万博は、当時が経済成長のピークで、そこから関西の凋落が始まった。2025 年の万博は、逆説的に言えば、ボトムから這い上がる万博であり、ある種の高揚感がある。カジノは別として、万博の跡地をどう活用するのか、MICE 誘致も考えたときに、広いリゾート地として、人を呼べる魅力の一つになるのではないか。ラグビーや WMG などのスポーツイベントも関西で次々開催され、経済への波及効果も見込まれる。2025 年の万博は、経済のボトムから這い上がるというくらいの気概でやる、という意気込みはビジョンに書き込めるのではないか。
- ・ イノベーション創出に向けた実証実験の積み重ねを今からやっていく。その過程として 2025 年万博というイベントがあり、そこに壮大な最先端の実験の場所があるという考え方。

#### <事務局>

- ・ 万博を実証フィールドとしてどう見せるのか。構成府県市でやっている様々な取組を万博の期間中に見せていくことで、万博がそういう場所だと認識され、投資が集まり、若者が起業し、関西に行きたいと思える人が増えるのではないか。

### 【「はじめに」「Ⅰ．現状認識・課題」について】

#### <委員>

- ・ 資料 1（概要版）の「1.関西経済の現状・課題」で「女性をはじめとする多様な人材が活躍する余地あり」と記載されているが、「余地あり」ではなく、ぜひ戦力となってほしい、という状況であるので、例えば「多様な人材の活躍が期待される」といった積極的な文言に置き換えてはどうか。
- ・ 資料 2（中間案）の P.2「（2）好調なインバウンド」で、「平成 24 年からの 6 年間で 3.84 倍と、全国を上回る伸びを示しており、関西には一定、優位性がある。」と記載があるが、論理の飛躍があるのではないか。「優位性がある」

と言うためには、「リピート率が高い」「来訪者の評価が高い」など、何らかの評価を入れないと、ロジックとして成立しないのではないか。

- ・ これまでの主な取組で、戦略 2 について、公設試の割増料金解消を記載いただいておりますが、重要な取組であることは重々承知しているが、これが大上段に掲げる取組というのは少し寂しい気がする。他にも国際競争力の強化のためにすべき取組はあると思う。

### 【Ⅲ．広域課題に対応する「関西経済活性化戦略」について】

#### 《戦略 1》

##### <委員>

- ・ キーワードの 1 つである「イノベーション」について、イノベーションがどう生まれるかのプロセスは、何十年も前から議論されている割には進んでいない状況で、何をもってイノベーションを生み出す仕組みにするのかは難しいと考える。四半世紀前に、企業のイノベーションを支えるのは知識創造であり、どうやったら知識創造が生まれる環境になるのか、という話で、暗黙知などの議論がなされたが、結論的にはどれもうまくいかないという形で今に至っているのが現状。関西広域連合の事業として、知識創造をもたらす仕組みとして、現行ビジョンからの継続として、メディカルジャパンのような展示会に出展することで、知識をいかにネットワーク化して、そこでインスパイアを起こすか、その機会を色んな形で提供するということが、施策としてイノベーションの基盤を作ることだと思う。その流れは今後も変わらないとは思いますが、改訂ビジョンで、何か新しく加えた表現はあるのか。

##### <事務局>

- ・ 戦略 1 に「オープンイノベーション」という言葉を入れている。これまでは、系列企業の中で研究開発が進められることが多かったかと思うが、これからは、異分野と連携することが重要な要素の一つになってくるかと考える。また、データサイエンス人材の育成に取り組む大学やデータ利活用センターの基盤があり、各構成府県市でもイノベーションを起こす仕組みが出てきつつあるので、関西広域連合としてはそれらをつなげていく、ということが今後の展開になると考えている。

##### <委員>

- ・ 資料 2（中間案）の P.8 に「公的分野における制度や仕組みの見直しなど、」と記載していただいているが、海外からの対内直接投資額は、対 GDP でいうと OECD 諸国の中でも末端であり、もはや、企業は日本を選択していない。2018 年の世界銀行のビジネス環境ランキング（世界 190 カ国・地域の資金調達環境や電力供給、税制など 10 項目を分析し順位付けしたもの）においても、「起業のしやすさ」が 106 位に留まっている状況であり、日本は海外から人も入ってこないし、仕事を起こす環境でもない。ただ、逆に言うとそれはチャンスであり、そうした状況を関西広域連合が変える。制度、仕組みを変えて、海外から投資や人材が入ってきて、起業しやすい環境をつくる。そういう構造転換を関西ができる、ということをビジョンで提案できればインパクトがあると思う。

#### 《戦略 2》

##### <委員>

- ・ 改訂ビジョンでは、関西が選ばれるための戦略は何か、を打ち出すことが大切。まだ、「グローバル」というと、「海外に出て行く」という視点で書かれているが、今や、「いかに選ばれるか」という視点から記載しないとイケない。その際、インバウンドと海外からの投資はセットなので、そこを明確に記載いただきたい。例えば、ICT への投資比率が、世界から周回遅れの中で、どうやって海外からイノベーションやお金を取ってくるかを、前面に出さないといけない。一方、インバウンドについては、2015 年の中国（爆買い）から、いまや欧米（消費単価が高く、色んな場所に行ってくれる、

為替レートの変化に消費行動が左右されにくい) をターゲットにしている。

- ・ 財の輸出（アジア向けの電子部品等）とサービスの輸出（サービス貿易：インバウンド）が関西経済を支える、という視点からは、ある種の輸出戦略（ニーズが高いものを売る、付加価値の高いものを売る）を示すべきではないかと考える。インバウンドに関してもアウトバウンドに関しても、輸出戦略をしっかりと練るべき。関西が選ばれ続けるために大切なことは、付加価値があるものを作って、メニューを展開し続けること。
- ・ グローバル化の段階は、「外に出て行く」と同時に「外から入ってくる」の循環構造ができて初めて進化の過程に入るといわれている。日本は海外に出て行くだけで、海外からの投資は行われていない。その突破口となるのが関西広域連合である、という意気込みが欲しい。

## 《戦略3》

### <委員>

- ・ イノベーションの基盤となる知識創造を支えるのは人であり、ここでいう「人」には、海外から来る人材も含まれる。今の観光政策では、量（どれだけ日本で消費してお金を落とすか）しか議論されておらず、知識と投資をもたらしてくれる海外の人材（クリエイティブ・クラス [科学者、エンジニア、芸術家、文化創造者、経営者、専門家、技能者]、エグゼクティブ [企業などの上級管理職]）をもてなす、という発想がないのではないかと。クリエイティブ・クラス、エグゼクティブのもてなしについては、産業の分野で取り組むべきではないかと。P.9「インバウンドの産業化」に、追記いただきたい。一体誰をもてなすのか、が議論されていないが、産業分野でもてなすべき相手は、日本に知識や投資をもたらす人であり、そうした人が関西に来てもらえるようにするにはどうすればいいのか、がこれからの課題。
- ・ 資料2（中間案）のP.10に、「「ワールドマスターズゲームズ2021 関西」や「2025 日本万国博覧会 [誘致活動中]」などのビッグイベントは、関西の魅力の世界に発信する絶好の機会であることから、この機会を活用し、関西の産業ポテンシャルや地域魅力を発信していく。」とあるが、単なる一過性の魅力発信で終わらせたくない書きぶりに工夫いただきたい。単なる魅力発信で終わらせるのではなく、産業振興に結びつける。2020年のオリンピックで盛り上がる首都圏から関西に元気を引っ張ってくるというようなことが分かる表現に修正いただきたい。
- ・ 2020年の東京オリンピック→2021年のワールドマスターズゲームズ2021 関西→2025年の万博、と繋がるように、関西をスポーツで作り直す、という立て付け（スポーツを引き金として位置づける）にするのもあり。
- ・ この産業ビジョンでは、農林水産業に関する取組は対象外で整理しているのか。6次産業化や観光にかかわるものについては若干触れられているが、農林水産業は、安心安全、ブランド化など海外輸出に向けそれぞれ努力しているが、このビジョンでは一切記載されていない。商工業中心にならざるを得ないというのも理解できるが、農林水産業に関しても、前向きなところを触れていただければと考える。
- ・ 農林水産業について、日本ではまだ規制保護産業としての位置づけであるが、社会全体として、産業の捉え方が変わってきており、第一次産業、第二次産業、第三次産業の区別がなくなってきている。うまくパッケージ化されることによってビジネスやイノベーションが生まれるというのが世界の潮流。
- ・ 農家が高齢化しているが、これまでの知恵を生かして、体力が必要な部分はロボット等がカバーして、付加価値の高い作物を作っていく取組は進んでいる。農林業を支えるロボット、アシストスーツの技術が発展している。また、若者が宇治茶を生かして新しくカフェを立ち上げたり町おこしをしたり、という取組事例もある。

### <事務局>

- ・ 農林水産業については、農林水産部（和歌山県）との連携を記載している。産業ビジョンとして記載するのであれば、地域経済の活性化以外では、「農林水産業を支える産業、物流をどう伸ばすか」という視点で記載することができるのではと考える。真正面から記載すると、所管外に言及することになってしまうので、関西の利点（生産地と都市圏がコンパクトに存在している）を生かして、周辺産業の発展やインフラ整備に資する、という観点からの記載になると考

える。ご指摘を踏まえ、戦略3の記載内容について、工夫する。

### 《3つの戦略を下支えする 関西を支える人材の確保・育成》

#### <委員>

- ・ インバウンド・観光は地方経済の柱になるといわれているが、今後、観光客がゴールデンルートから地方に来てても、人材不足であるため、農泊、民泊など、観光客をおもてなしできる人材がいない。関西広域連合として、インバウンドを強化することを考えたときに、大阪や京都に来ているインバウンドを周辺の地域に回していけるか。単なるものづくり系の人材確保だけでなく、おもてなし人材の確保策についても考えるべきではないか。
- ・ おもてなし人材が不足しているのであれば、ロボットがフロントで接客するなど、関西らしい、新しく面白い枠組みを作ること、京都に溢れかえっている観光客を周辺地域が取り逃さないような取組をできるのではないか。
- ・ 高度外国人材について、ベトナムなど東南アジアから優秀な学生が来ており、日本で就職したいという声もあるが、関西に東南アジアの突出した技術力を持った企業を呼び込んでくる仕掛けも必要ではないか。これからは、賃金が安い海外で生産するのではなく、海外の優秀な企業を関西に呼び込んでくる必要があるのではないか。
- ・ 生産年齢人口が減少する中、国会で議論されている外国人在留制度の見直しは、産業界としても非常に関心を持っている。資料2（中間案）のP.10に「外国人材が活躍できる環境整備に向けた検討も必要である。」という記載があるが、悠長ではないか。もっと踏み込んだ表現にしてみたいのではないかと問題意識がある。企業にヒアリングしていると、各業界とも在留資格の拡大については、概ね歓迎。ところが、高度人材ではなく中間層の受け入れになるので、日本語教育が最大のネックである。これから大量の外国人労働者が流入してくると、企業では日本語教育の対応ができない。それは国がするのか自治体ができるのか分からないが、そういった体制の整備をしないと実際の稼動には結びつかないというのが不安材料。また、外国人材の受入環境整備の中で、外国人を受け入れる日本人の意識改革も必要であるし、待たなしの状況である。このタイミングでビジョンを改訂するのであれば、そういうところにスポットを当てれば、新しい展開が見えるのではないか。産業ビジョンであるので、教育の側面までどの程度記載できるかには限界があると思うが、産業界にとっては、人材を確保するためには、最低限の日本語教育をしてもらわないと難しい。
- ・ 外国人労働者について、現場では大変という話を聞いている。企業の中では、日本語学校を作りはじめていて、そこで外国人労働者がネットワークを作っているという動きも出始めていると聞いている。国で制度設計について、議論がされているようだが、関西としていち早く手を打つという提案があってもいいような気がする。
- ・ 政府は、外国人労働者に関して、相当大きな動きを示し始めている。人材を確保するという点では、一番ホットなテーマではないか。どこまで記載できるかは別として、外国人材について取り組むことで、関西広域連合として、一步先んじていく、という姿勢を示してもいいのではないか。
- ・ 東京一極集中の状況で、東京へ出て行った人材を関西にどう返せるかが課題。東京で就職したが、就職後3年以内の離職率は高いので、早期に離職した方を実家のある地域にうまく戻せる仕組みを考えている。そうして帰ってきた方が「都落ち」ではなく、堂々と帰ってくるができる受け皿（東京で得たものを地元を持って帰ってきた、東京ではうまく行かなかったが地元では輝ける）が必要ではないかと考えている。
- ・ 優秀な人材が都市部に出て行き、そのまま帰ってこないのが地方の実情。都市部でうまくいかず地方に戻ってくるというケースが多いが、地方の立場としては、成功して帰ってきたり、エースがエースのままで帰ってきたりして欲しいと考えている。
- ・ 地方では、求人広告をしても応募がないという企業も存在する。欲しい人材どこか、誰でも来て欲しいと思っても誰も来てくれないケース。そういう面で、人材に関しても、都市部（京阪神）と地方では温度差があるのではと感じる。
- ・ 最近、地元志向の若者が増えている。「都会で負けて帰ってきた」のではなく、「東京で得るものを得たので、それを地元に戻元するために帰ってきた」という形で帰ってくるができる仕組みが必要。

- ・ 成長戦略に大切なのは、人、資本、技術進歩。その中で、関西の女性の就業率をどう引き上げるかは喫緊の課題であり、女性の就業について、もっと強調してもよいのではないか。
- ・ 女性の就業率が低いので、一定ポテンシャルがあるという記載になっているので、そこをもう少し引っ張り出すような、もっと自由な働き方、色んな人たちが多様に働ける枠組みが必要ではないか。

#### <事務局>

- ・ 人材の確保について、「東京から関西に人を戻す」「関西の学生、留学生を域内にとどめる（関西の中で育て、循環させる）」か、どちらがいいか、委員のご意見を伺いたい。

#### <委員>

- ・ やはり、東京に仕事があるので東京にいってしまうのではないか。面白さでいうと東京よりも大阪がいいとは思うが。ただ、東京に行ってしまうと、関西は、帰りたいときに帰れる地域である、というような懐の大きさを示すべきではないか。
- ・ 地域の経済の情報が求めている人に届いていない、一種の情報の非対称のような現象が生じている。出て行かなくてもいい人が出て行ってしまっているのは問題。
- ・ 関西で人材を囲い込むというのは難しいのではないか。世界で羽ばたく人材を育成するため、外（首都圏や海外）に出すという勇気も必要。  
 地元では、地元志向が強い若者に成長してもらう。東京や海外を見る機会を与えるのも大切で、地元出身者が世界で活躍しているというのは、地元民の誇りではあるが、地元経済には貢献していない。  
 スポーツも同じであり、優秀な選手が大学進学時や就職時に東京に出て行ってしまふ。東京は経済力、人材育成力が強い。関西でも、経済力や人材育成力を強化すれば、流れは変わるのではないか。関西を「残りたい」と思える地域にすることが必要。
- ・ 人材について、域内で取り合いをしても意味がない。なぜ、学生が外に出ていくのかというと、関西経済が停滞していると思われており、魅力を感じられないから。インバウンドをはじめ関西経済が成長していることを認識してもらうことが大切。国内の人口減少が進む中、域内で人材を循環させるというよりも、外から人材をどれだけ取り込むかの戦略を立てると、海外から人材が入ってくるのではないか。人材が外に出て行くのは構わないが、人材が入ってくるようにモビリティ（流動性）を高めることが必要である。